九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 中国語を第一言語とする日本語学習者のための漢字読み方指導法開発に向けた基礎研究 ： 中国語知識の利用をめぐって

薛，華民

https://doi.org/10.15017/1398300

出版情報：九州大学，2013，博士（比較社会文化），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

| | |
|---|---|
| 氏名・(本籍・国籍) | 薛　華民（セツ　カミン）（中　国） |
| 学位の種類 | 博士（比較社会文化） |
| 学位記番号 | 比文博甲第２１６号 |
| 学位授与の日付 | 平成25年9月30日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当　比較社会文化学府　国際社会文化専攻 |
| 学位論文題目 | **中国語を第一言語とする日本語学習者のための漢字読み方指導法開発に向けた基礎研究**<br>**―中国語（漢字）知識の利用をめぐって** |
| 論文調査委員 | （主　査）教　授　井上奈良彦<br>（副　査）准教授　李　相穆　　准教授　西山　猛<br>教　授　久保智之　　准教授　郭　俊海 |

## 論　文　内　容　の　要　旨

中国語をＬ１とする日本語学習者は非漢字圏の日本語学習者と比較し、漢字学習において母語（漢字）の知識が活用できる反面、中国語の知識が日本語の漢字音学習を阻害する場合もあることが多くの研究により明らかになっている。また、長音や促音など日本語の特殊音声は現代中国語（「普通話」や多くの方言）には存在しないため、中国語 L1 学習者にとって、その音声上の知覚が比較的困難であり、習得しにくいことが分かっている。さらに、一つの漢字に複数の読みがあること、即ち漢字の多読性による困難も多くの研究により指摘されている。

このような問題や困難に対し、中国語 L1 学習者向けの適切な漢字読み方指導を行わなければならないにもかかわらず、これまでこの問題への対策や指導方法を講じる研究はほとんどなかった。中国の日本語教育現場においても、漢字ないし漢字読み方の学習は相変わらず学習者自身に委ねられ、指導する側から軽視されたままであるため、問題解決に向けた動きが一切見えず、改善の見込みがはっきりしない。こうしたことを背景に、漢字の読みの体系についての指導が求められている。本研究は先行研究の知見に基づき、中国語 L1 学習者による漢字読み方学習の主な問題をめぐり、中国語（漢字）知識の利用に着目し、中国の日本語教育現場で活用できるような指導方法や問題への対策を体系的に立てようと試みるものである。内容は以下の 9 章から構成されている。

第 1 章では、本研究の研究背景、研究目的、研究概略および用語の定義を示した。

第 2 章は本研究の理論的根拠及び研究課題を導くための章である。まず、SLA 及び認知心理学の二つの視点から L2 の学習における L1 の影響を論じた。次に、L2 の学習における語彙習得に関する知見を整理し、とくに学習者の心内辞書の構築・アクセスの過程を概観した。さらに、中国語 L1 学習者による漢字語の音韻処理についてこれまでの知見をまとめ、本研究の扱う漢字読み方学習に対する示唆を考えた。最後に、中国語 L1 学習者による漢字読み方学習の問題を整理し、また提案された指導法及び残された課題を踏まえ、本研究の研究課題を提示した。

第3章では、アンケート調査を通じ中国語L1学習者による日本語漢字の同定状況を明らかにした。結果は、学習時間が 1 年以下（初級レベル）の学習者はまだ望ましい水準とは言えないが、学習時間 2 年以上（中級もしくは中上級レベル）の学習者は、ほとんど問題なく同定できていることが確認できた。即ち、中国語 L1 学習者が日本語漢字を見て中国語の知識を思い出せるという本研究の前提の成立が確認できた。

第 4 章は、常用漢字表の範囲で、中日音韻対照研究を行い、具体的には中国語の声母と韻母を日本語の行（子音）と母音部分（子音以外の部分）とそれぞれ比較し、中日漢字音の対応関係を整理した。結果としては、中国語発音を手がかりに日本語漢字音の記憶や推測などができるようなルールを見つけ出した。

第5章では、音韻対応関係（一部）の簡素化や促音の学習と深い関係を持つ入声字音をめぐり、その識別（特定）方法を検討した。中国語音節知識、形声文字の音符及び漢詩の押韻ルールを利用すれば、問題なく入声字を識別（特定）できるという結果を得た。

第6章では、長音・短音の問題をめぐり、まず中国語の「韻母」部分と日本語のその「転写」との対応関係に基づいて長音と短音の「境界」（弁別手がかり）を明らかにした。つぎに、中国語の声調知識（第1声と第3声）を利用し、長音・短音の産出方法を提案した。

第7章は、主に複数音の問題を検討した。具体的にいうと、「音読みが複数ある漢字」の読み分けと「音読みと訓読みがともにある漢字」の読み分けに分けて考察を進めた。前者の部分では、中国語漢字発音、漢字の意味、漢字の語中位置などの手がかりを使って読み分ける方法を考察した。一方、後者の部分では漢字字数、仮名の有無、漢字の意味特徴や漢字の語中位置などから音読みか訓読みかを判断する方法を検討した。

第8章では、漢字読み方体系の指導における学習総漢字数の確定の必要性に応じ、中国日本語教育における漢字の選択状況、日本語教育一般における漢字の選択状況、日本社会の漢字使用状況などを踏まえ、中国語L1学習者に適した学習漢字を選出し、読み方の整理を行って漢字表を作成した。

第9章では、前述した内容・結果を要約した上で、本研究の結論として漢字読み方指導への提案をまとめた。本研究は中国語L1学習者によるすべての漢字読み方学習問題を網羅的に分析し解決案を提供しようというものではなく、本研究を通じ少しでも中国語L1学習者向けの漢字教育に有効な示唆を提示することを目指すものである。さらに具体的な指導方法への応用は今後の課題として提示した。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、中国語 L1 学習者による漢字の読み方学習の主な問題をめぐり、中国語（漢字）知識の利用に着目し、中国の日本語教育現場で活用できるような指導方法や問題への対策を体系的に立てようと試みたものである。

中国語をＬ１とする日本語学習者は非漢字圏の日本語学習者と比較し、漢字学習において母語（漢字）の知識が活用できる反面、中国語の知識が日本語の漢字音学習を阻害する場合もあることが多くの研究により明らかになっている。また、長音や促音など日本語の特殊音声は現代中国語（標準語である「普通話」や多くの方言）には存在しないため、中国語 L1 学習者にとって、その音声上の知覚が比較的困難であり、習得しにくいことが分かっている。さらに、一つの漢字に複数の読みがあること、すなわち漢字の多読性による困難も多くの研究により指摘されている。本論文はそういった問題に対応するための漢字の読み方指導に関する研究の基礎となるものである。

内容は以下の9章から構成されている。

第1章は、研究背景と研究目的などの研究概略および用語の定義を示している。

第2章は、理論的根拠及び研究課題を導くための章である。まず、L2 学習における L1 の影響を論じ、次に、L2 の学習における語彙習得に関する知見を整理し、とくに学習者の心内辞書の構築・アクセスの過程を概観している。さらに、中国語 L1 学習者による漢字語の音韻処理についてこれまでの知見をまとめ、本研究の扱う漢字の読み方学習に対する示唆を導きだした。最後に、中国語 L1 学習者による漢字の読み方学習の問題を整理し、また、これまで提案されてきた指導法及び残された課題を踏まえ、本研究の研究課題を提示している。

第3章は、質問紙調査を基に中国語 L1 学習者による日本語漢字の同定状況を明らかにしている。学習時間が1年以下(初級レベル)の学習者の結果は望ましい水準とは言えないが、学習時間2年以上(中級もしくは中上級レベル)の学習者は、ほとんど問題なく同定できていることが確認できた。

すなわち、中国語 L1 学習者が日本語漢字を見て中国語の知識を想起できるという本研究の前提の成立が確認できた。

第 4 章は、「常用漢字表」の範囲で、中日対照研究によって音韻の対応関係を整理している。その結果、中国語の発音を手がかりに日本語漢字音の記憶や推測ができる対応規則を見つけ出した。

第 5 章は、中日音韻対応関係の簡素化や促音の学習と深い関係を持つ入声字について、その識別方法を検討している。中国語の音節要素、形声文字の音符及び漢詩の押韻規則を利用すれば、概ね入声字を識別できるという結果を得た。

第 6 章は、長音・短音の問題を取り上げている。まず、中国語音節の韻母部分と日本語のその「転写」との対応関係に基づいて長音と短音の「境界」（弁別手がかり）を明らかにした。つぎに、中国語の声調知識（第 1 声と第 3 声）を利用し、長音・短音の産出方法を提案している。

第 7 章は、主に複数音の問題を検討したものである。音読みが複数ある漢字では、漢字の中国語発音、漢字の意味、漢字の語中位置などの手がかりを使って読み分ける方法を示した。一方、音読みと訓読みがともにある漢字では、漢字字数、共起する仮名の有無、漢字の意味特徴や漢字の語中位置などから音読みか訓読みかを判断する方法を提案している。

第 8 章は、漢字読み方体系の指導における学習総漢字数の確定を目指したものである。中国の日本語教育における漢字の選択状況、日本語教育一般における漢字の選択状況、日本社会の漢字使用状況などを踏まえ、中国語 L1 学習者に適した学習漢字を選出し、読み方の整理を行って漢字表を作成した。

第 9 章は、それまでの内容を要約し、本論文の結論として漢字読み方指導への提案をまとめたものである。

以上のように本論文は、これまで中国語 L1 学習者向けの適切な漢字の読み方指導の必要性が認識されているにも関わらず、その対策のための研究がほとんど公開されていなかったという不足を埋めるものである。この点を言語学および言語教育学を専門とする調査委員全員が高く評価した。本論文は中国語 L1 学習者によるすべての漢字読み方学習問題を網羅的に分析し解決案を提供するものではないが、中国語 L1 学習者向けの漢字教育に有効な示唆を提示するという点で中国語を L1 とする日本語学習者の漢字教育の研究と実践における重要な貢献である。さらに韓国やベトナムなどにおいても漢字知識を有する学習者を対象とした研究へと発展していくことも期待できる。したがって、調査委員会は本論文が博士（比較社会文化）の学位を授与されるに十分な内容を有するものであると判断した。